出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

<サロン・あべの>NO．44　　平成　2年　2月17日（土）発行

にぎやかに楽しくホノボノとした新年会

雪は日本海側においてきた典型的な冬型の青空が広がる平成二年一月二〇日（土）午後一時～三時半、あべのベルタ地下2階のレストラン「E・FLAT」に於てサロンの新年会が開かれた。

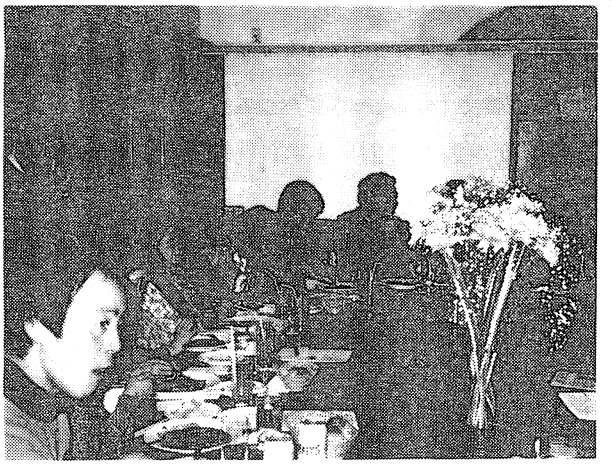
松の内が過ぎたとは言え、今年初めて出会う人達の挨拶は「おめでとうさん、ことしもよろしく」から始まった。貸し切りになった店内は、ひょうたん形の大型テーブルが中央にでんと構えてあり、その周囲に椅子がぐるりと並んでいる。本番前から愉しい輪がそこここに出来て、初対面の自己紹介や、お正月のあれこれ話に花が咲いた。

参加者がそろったところで、井上氏の司会でサロンの新年会が開催された。

大島氏に音頭をとっていただき、ワインで「乾杯！」。今年の出会いを喜んだ。前菜、スープ、ホカホカパン、野菜サラダ、ステーキと料理がすすむほどに会話もはずんだ。

食事が済んだところで石田氏の進行で自己紹介を兼ねたゲームが始まった。あらかじめお正月に関係のある「もの」品物や行事、あそびなどを書いた紙を配り、自分の取った紙に書かれている「もの」のヒントをだし全員で当てるというゲーム。ヒントひとつでパッとわかる品物、ヒントそのものを考えるのにひと苦労の行事。参加二五人があゝだ、こうだわいわいガヤガヤ。

プレゼントも用意され、にぎやかに、楽しく、ホノボノとした新年会はめでたく散会。



「サロン・あべの」一月の出会い

貴重な体験

上平幸雄

一月二十四日（水）、茨木市にあります施設の研修会で、講師としてお話しをさせていただく機会がありました。講師と言っても、ぼく自身が生まれてから、現在三十二歳になるまでに、障害者として経験してきたことを、雑談程度にお話ししただけですが…。

そこは、主に養護学校の卒業生を対象にした、在宅障害者デイ・サービス施設です。自立生活プログラムのようなことをされているそうですが、いつまでも親にベッタリの生活で、自分の将来についてなかなか真剣に考えようとしてくれない利用者に、施設の外の障害者の体験談を聞かせることで、少しでもやる気を出してもらおうと、今回の研修会を計画されたそうです。数人の講師を予定されているそうですが、ぼくはそのなかの二番手でした。

十四歳まで在宅だったこと、普通高校へ進学したこと、身体障害者職業訓練校へ行ったこと、自動車の運転免許を取ったこと、就職と転職、結婚など、ぼく自身の生い立ちを一時間ほどお話ししました。

はたして、お役に立てたのかどうか分かりませんが、ぼく自身にとっては、とても勉強になったと思います。自分自身のことを、ほかの人に話すという作業を通して、これまでの自分自身を客観的に見ることができました。また、今まで自分でも気が付かなかったことが見えてきたりもしたのです。

ひょっとすると、今回の研修会で一番勉強になったのは、講師であるはずの、ぼく自身だったのかもしれません。

自分のために

「自分のためなんだから」と、どれだけたくさんの人からどれほど何度も言い聞かされてきたことだろう！

子どものころ、親から、教師から、勉強しろと言われるときはいつも「自分のためなんだから」と言われてきたのである。

「自分のために生きる」ということは、なにかこう、ぼくにとっては、幼いときから植え付けられた鉄則のような気がする。疑いようのないものとして周囲の大人たちから与えられたはずなのだが、それは、ぼくの耳にはなにか虚しいうつろな響きをもつ言葉でもあった。

先日も、戦時中の村を描いた映画がテレビで放映されていて、「お国のために」と説得されて、人々が家の鍋や釜を軍に差し出すシーンがあった。牛や馬も「お国のために」もっていかれた。家族も「お国のために」バラバラになった。「お国のために」という言葉の虚しさを感じながらも、村人たちは、それを口にすることはできなかった。

「自分のために」という言葉は、「お国のために」という言葉の裏がえしとして、戦後の日本人に与えられたものなのかもしれない。

おそらくは「自分のために」、頭に「勝利」と書かれたハチマキをして、お正月も休まずに塾で受験勉強に励んでいる小学生の姿をテレビで見ると、「自分のため」も「お国のため」も、内容的には似ているのではないかとさえ思えてくる。

そうやって「自分のために」勉強し、クラスメートもすべて競争相手としか見ない生活をして、結局どうなるか。「お国のために」した戦争が結局は日本を破滅に追いやったように、「自分のために」それだけのことをしても、最後は「自分」のためにはならなかったということになりはしないか。

ぼくの勤めている大学は、学生たちは本当に小さい頃からよく勉強をしてきた人たちばかりで、きっと「自分のために」ずいぶん頑張ってきたんだろうなと思わせるのである。

彼らの学生生活の抱負をよく聞いてみると、やはり何か「自分のために」の延長上にあるような気がする。勉強するのも自分のため、遊ぶのも自分のため、友だちをつくるのも自分のため、である。

何かを「得る」ために勉強する、自分にプラスとなる人とつきあいたい、いまやっておかないと損をする、といった口調に、彼らの「哲学」のようなものを感じる。

「自分のため」ということをエゴイズムだ、利己主義だと批判しているわけではない。何か虚しいのではないかと疑っているのである。

自分のために知識を得て、自分を研き、自分を高めようと必死に努力したとして、そして、ついにその目的を達成したとして、そのとき一体、誰といっしょにその喜びをわかち合うのだろうか。

鏡の前で一人にっこりと微笑むのだろうか、まるで、セルフタイマーで、ひとり記念撮影でもするかのように。それとも両親と喜びあうのだろうか。確かに、「自分のために」だけ生きた人を心から祝福してくれるような人は、いるとすれば、その人の両親ぐらいなものだろう。

その意味で両親の死は、その人の人生の意味を変えていいはずのものである。自分のために生きていれば、それで喜んでくれる人が、ついに地上から完全に消えてしまったことを意味するのだから。

「自分のため」に生きる生き方の末には、何があるのだろうか。限りなくいとおしく思い続けた「自分」も、時がくれば誰も例外なく土になる。そこには、絶望と孤独しかないのではないか。

動物は「自分のために」生きてはいない。動物は「種（しゅ）」のために生きている。だからこそ、雌の産卵のために雄は雌に食べられるという昆虫もいる。

では、人間は何のために生きるのか。「お国のため」ではないことは確かだ。しかし、かといって、「自分のため」なのかどうかもかなり怪しいものだと思うのである。

（知）

”おしゃれ“って、いいね。

心の豊かさが、その人の言葉や起ち居ふるまいに現われるように「おしゃれ心」を持っている方は、何気ない端々にキラリと光るおしゃれセンスを見せて下さる。周りの人達は、その静かな華やぎと楽しさに、心が和む。その「おしゃれ心」を持っておられる方に「おしゃれ」について書いていただいた。

”私の　赤い車イス

糀谷　終一

私の現在の車イスは、赤のフレームに黒のシートというカラフルな物である。これは何も初めから、こうであったわけではない。初めの頃はどこにでもある車イスであった。しかし、私が国体に出場する時にこのような赤い車イスに敢えてしたのである。理由は実に単純で、ただ目立たせたかっただけである。しかし、実は私の心の奥にはもう一つの理由があった。それは、車イスに乗っている私が暗いイメージに取られたくないということであった。私がまだ非障害者の頃、障害者は暗い、汚いというイメージが私の心を占めていた。そのイメージがいつまでも私の脳裏に残っていて、町中へ出るたびに何か心の晴れない思いがしていた。だから、車イスのイメージを変えることは、私としては何の抵抗もなく踏み込めたのである。

この赤い車イスに乗りだしてから、いろいろな変化があった。その一つは、今まで余り見向きもされなかった同じ車イスの人からじっくり見られるようになり、中には見知らぬ人から声までかけられるということであった。その二は、レストランなどへ行った時、必ずボーイなどが声をかけてくれ、時には手まで貸してくれるということである。特に、服装と車イスの色がマッチしている時などは客までもが見てくれる。（これはひょっとして私の思い過ごしかもしれないが、私は出来るだけいいように解釈することにしている）しかし、一番の変化は私の心の中にある。今まで外へ出て行くにしてもやゝ億劫がちであったが、この赤い車イスに乗りだしてからは、人から見られることに対して不快な気持が起こらなくなった。なぜなら、周囲の人達はきっと私を見ているのではなく、私の乗っている車イスを見ているんだと思うようになったからである。

このように、車イス一つを変えただけで心の変化が生じたことは私にとっては大きなプラスであった。

国際障害者年も折り返し点を過ぎ、一般市民も障害者を普通の人間として見てきている現在、私も普通の人間として振る舞っていきたいと思っている。

”私のおしゃれ

山本　篤江

私のおしゃれは、そんなにたいしたものではありません。ただ気を付けているとす

ればでどうせ車椅子やから、誰も見ていないわ。どんな物を着ていたって値打ちがない」とかを考えないように心がけているだけのことです。車椅子だからこそ、いつもすっきりした身なりをしていなければと思います。現実的になりますが、いつどこで助けてもらわなければならないかわからない私達です。目に付く所のオシャレも大事ですが、隠れたオシャレのほうに力を入れなければならないかと思います。

たとえば、下着の裾が出ていないとか、嫌な体臭をさせていないとかです。

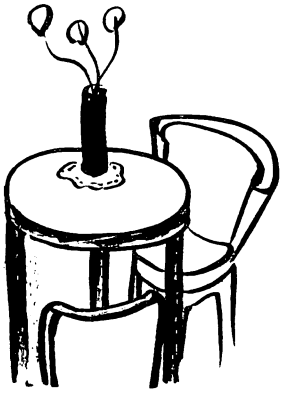
そして、もう一つは、私は、ほとんどジーパンしかはきませんが、上着は、Tシャツとか、トレーナーが多いです。

たまには、ブラウスとか、スカートを履いてみたい、着てみたいと思います。

また、着ていかなければならないときは、ジーパンではなく、少しオシャレなパンツとブラウス。そして、靴も少しオシャレな物を。つまり、自分にあったTPOを考えています。いつでもとは言いませんが、出来るだけ心がけていきたいと思います。

たとえ、おばぁちゃんになっても、オシャレでかわいくありたいです。

美智子のこんな話



岸田　美智子

重度障害者とお正月

また、新しい年が明けましたが、この年末年始になると私の回りでは、「お正月かぁ〜〜。介助が無くなるなぁ。」という溜息にも聞こえる声をよく耳にします。

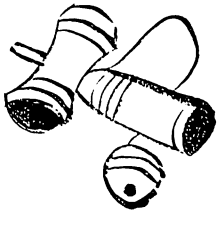
学生などは、郷里に帰ったりアルバイトをしたりして居なくなるし、主婦や社会人も家庭の事や旅行などで忙しくて障害者の介助に入ったり出来なくなるのです。

だから、仕方なくグループホームなどで共同生活をしている自立障害者でも、介助を減らすために、親や家族が介助出来る人は実家に帰ったりしています。施設障害者もお正月ぐらい家に帰りたくても、その家に帰る介助が見付からないし、もし、運良く見付かって帰れたとしても、家でのお風呂やトイレなどの介助が出来ないので帰れない施設障害者の仲間も多くいるのです。

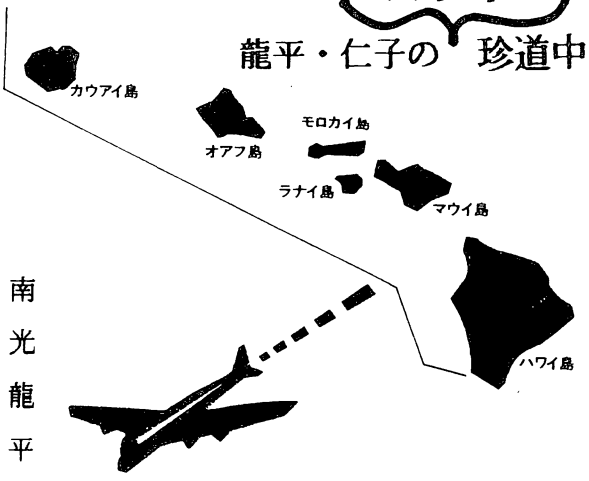
また、福祉工場で寮生活をしている仲間は、年末年始は寮に居られないし家族からは勘当されているので居場所がないと、私達の事務所に転がり込んできたりするのです。それなのに、行政的な制度保障も休日や夜勤までは考えられないのが現状のようですから、大みそかやお正月の介助の事なんてまだまだみたいです。

でも、介助には大みそかもお正月もないのですからネ……！！！

本当に一日でも早く私達も心から「明けましておめでとう」と言える、そして、それぞれ思い思いのお正月が過せるようにしたいものです。



ハワイ 龍平・仁子の珍道中 ④



南光龍平

「いちばん長い日」

ハワイにやってくるたびに、いつも街のなかでじつに多くの車椅子の障害者に出会うことができる。そして、はじめて会った私達にも 軽く「ハーイ！」「コンニチワ！」なんて、笑顔で声を掛けてくれる。こんなことは、障害者に限らず、とても日本人には真似できないことだなぁといつも思ってしまう。（今どきの若者なら平気かもしれないが・・・）

ホテル近くのショッピングセンターで出会ったその人も、やはりそんな陽気な障害者のひとり。奥さんとふたりで、アイスクリームや果物などを売る店をショッピングセンターのなかで開いている。Nさんに案内されながら、ぶらぶら見物して歩いていた私達に、じつに気軽に声を掛けてきてくれた。聞けば、日本には一度障害者のスポーツ大会に参加するためにこられたことがあるという。

その時の感想などを話しているうちに、偶然にも、はじめて私がハワイを訪れたとき、すべての面で、お世話になったTさんとも知り合いだということが分かり、余計に話が弾んだ。

現在、確か沖縄におられるTさんは、五年前にはハワイの障害者自立生活センター（HCIL）に勤められ、障害者が自立生活をするための様々な援助の仕事をされていた人。その人のお陰で、五年前にはじめて「夢のハワイ」へ来ることができた訳で、今回の旅行でその人の名前を耳にするなど思ってもみなかった。やはり、世の中は狭い、いや狭くなったのだろうか。

それはともかく、一緒に写真を写すやら、アイスクリームを御馳走になるやらで、ほんとうに、きさくで陽気なハワイの人情に、旅行の第一日目から触れることが出来た。ホテル周辺の散策も終り、一日目のスケジュールは無事終了。

夕食もホテルのレストランでとったが、お昼の苦い経験を活かして控え目なオーダー。軽いもので済ませる人が多いなかで、私ひとりがしっかりと食べてみんなを驚かしてしまった。

食事と風呂を済ませたあとは、ひとつの部屋にみんなが集って飲んだり、食べたり、喋ったり。ひとしきりワイワイガヤガヤして各自の部屋へ戻ったのは、時計の針が十二時をさそうかなという時刻。もともと時差の関係から、ハワイ到着一日目は長いものだが、大阪空港での「待ちぼうけ」から始まった約四〇時間にわたるこの一日は、私たちにとっての「いちばん長い日」になった。

（つづく）

THE DEAF MUTE 33

旭　純子

大阪府地域福祉計画について

今回は前回のろうあ者福祉施策の課題のなかで触れた大阪府地域福祉計画の具体的内容をみてみたい。

大阪市地域福祉計画すなわちファインプランは地域内の社会資源を有効に利用し、地域住民の参加・協力を得て老人や障害者などが、日常生活を営む上での困難を解決していこうとする地域福祉思想に基ずき大阪府地域福祉推進本部が昭和五十八年に出したものである。

ファインプランは地域福祉のめざすものとして参加する福祉・総合的な福祉・在宅福祉の三点をあげ、皆が等しく幸せに暮らせるファインな（素敵な、快適な）社会を作り上げるためのものであるとしている。

そしてファインという単語のそれぞれにつぎのような目標を掲げている。

FはFull participation「完全参加」すなわち皆が自ら進んで、福祉活動に加わり、互いに支え合うこと。

Iは Integration「統合化」・いろんな施策をうまくかみあわせ、福祉のレベルを高めること。

NはNormalization「ノーマライゼーション」め老人も障害者も全ての人々が、地域社会の中で手を携えて共に暮らすこと。

EはEquality「平等」・全ての人々にわけ隔てなく、必要なサービスを保障すること。

なお、このファインプランは体系的には社会保障・地域福祉の土壌づくり・地域福祉の具体的展開を柱としている。そして社会保障では安定した生活をおくるために生活の基盤づくりとして年金・医療保険制度の充実ち最低生活の保障をあげ、地域福祉の土壌づくりとして地域福祉を支える人づくりと地域福祉活動を支えるものづくりとその具体的な展開をあげているが、これらについては次回においてふれてみたい。

おしらせ

＜サロン・あべの＞三月の出会い

日　時＝平成二年三月十七日（土）
　　午後一時～四時

場　所＝育徳コミュニティーセンター二階
　　研修室（ｶﾗｰﾌﾟ、車ｽﾃｰｼｮﾝ有り）

内　容＝「おしゃれで拡がる
　　コミュニケーション」
　　ニットデザイナー　あいか彩子氏

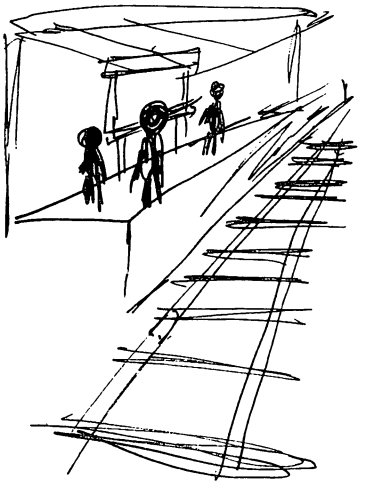
会　費＝なし

問合わせ先＝電話〇六－六九一－一〇二八
（冨田慶子）

なんとかしてェ〜な

秋野　富美子

ホームの点字ブロック上に立たないで



私は両股関節障害の為、松葉杖を使用しています。毎日地下鉄御堂筋線で天王寺から難波迄通勤しています。地下鉄の天王寺駅には、朝九時半頃に着く事になりますが大変なラッシュ時でホームの真ん中は、並んでいる人の列と行き交う人で大変、歩き難いものですから電車待ちしている人が並んで立っている前の点字ブロックの上を歩いて後方に近い車両迄行きます。

歩いて見て気がついた事ですが、この点字ブロックはいう迄もなく、目に障害のある目の不自由な人達の為に設けられたものなのですが、その点字ブロックの上に立って居られる人のなんと多い事か。ひどい人は、其処に荷物をおいて新聞を読んでいたり、夢中に読書していて両杖をついて私が近づいて行っても見向きもしない人がいます。私は、目に障害はありませんから、片足は白線より前へ出して人を避けて通れますが、目の不自由な人はこんな場合どうなさっているのだろうと何時も思います。若し、カバンや荷物につまずいて転べば下の線路に落ちる事もあるでしょう。命に関わる事です。ホームに居られる駅員さんが、もっと厳しく注意を促す放送なり、遠慮のない注意を与えていただきたいと思います。

これは、簡単になんとかなる問題だと思います。本当に、なんとかしてェ〜なと云いたいです。

＃感謝します＃

カンパ・お茶菓子・切手・新年会の写真等、ご協力ありがとうございました。お礼を申し上げます。

一月のカンパ　金二九〇〇〇円

秋野富美子、加賀谷正、川辺貴久、崎本ヒサエ、並松由利子、南光龍平、広岡泰枝、匿名三名様。（敬称略）

＜サロン・あべの＞第４４号

発行日　平成　２年　２月１７日（土）

発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会

［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26

電話(06)691-1028冨田慶子］

印　刷　セルフ社　電話（06)691-2365

［阿倍野区西田辺２－２－１０

グレース鶴ヶ丘１０１号］

定価　￥６２．